

女子日本代表リトアニア強化合宿報告書

2010 Women's National Team Camp in Lithuania

2010年7月13～20日

北沢岳夫

期 間 平成 22 年 7 月 13 日 (火) ~ 20 日 (火)
(チームは 7 月 6 日 ~ 20 日まで。6 日 ~ 12 日まで富田陽子氏 (愛媛県)、その後北沢が担当)
前半部分の報告書に関しては部会ニュースで発信されるものをご覧ください。

目 的 女子日本代表遠征の帯同審判として

リトアニア概要 旧ソ連から 1990 年に独立
人口 : 約 340 万人 首都 : ビリニウス (約 50 万人)
面積 : 約 65 千 k m² (北海道の約 8 割) 国技 : バスケットボール
FIBA ランキング : 男子 6 位 女子 13 位 (2010 年 7 月現在)
バルト 3 国の一つで 3 国合わせてバルトリグとしてバスケットボールの大会が行われている。

旅 程

7 月 14 日 11 : 40 成田空港発
16 : 05 コペンハーゲン空港着
20 : 55 コペンハーゲン空港発
23 : 25 ビリニウス着

コペンハーゲン空港での乗り換えは約 5 時間あり、次の便まで長時間であったため、乗継便の搭乗口案内が電光掲示に表示されていませんでした。チケットにはターミナルは記載されているものの搭乗口については無くどこに行ってもよいかわからないため、掲示されるまで到着したロビー付近で待ちました。結局約 1 時間半待ちました。

それでも出発まで約 3 時間あるのでカフェで食事をした後、免税店や周辺を見て歩き回り、出発時刻の 50 分ほど前から搭乗口付近で待機しておりましたが、搭乗予定時刻の 30 分前になっても搭乗が始まりません。念のため搭乗口へ行くと、自分が乗る便とは違う便が表示されています。慌てて電光掲示で再確認すると搭乗口が変更になっていました。日本とは異なり親切なアナウンスはありませんでした。常にそのような変更があるものと心して無ければならぬことを学びました。

しかし、機長の到着が遅れているとのことでその便は結局 1 時間ほど遅れての出発となりました。

ビリニウスに到着したのは夜中の 12 時半頃。リトアニア協会の方に迎えに来ていただきホテルまで送っていただきました。

チェックインしたのは夜中の 1 時半。日本との時差は -6 時間のため日本なら朝 7 時半ころであることや飛行機の中で睡眠をとったため疲れてはいたものの全く眠たくはなかったのですが、現地時間に早く慣れるためにもベッドに入り眠るようにしました。



写真はコペンハーゲン空港。夜 8 時ころですがこんなに明るい。リトアニアでも夜 10 時を過ぎないと暗くなりませんでした。

7 月 15 日 朝 8 時ころ目が覚めましたが時差ぼけの影響か頭痛がします。夕方にホテルで別の場所か

ら移動してくるチームと合流するまでフリーでしたので体を休めることも考えましたが、時差や気候に体を慣らすことが最優先なので朝食をとりホテルの周りを散歩することにしました。

深夜に空港に到着したため両替ができていませんでしたので、フロントに両替できる場所を聞くと「近くのホテルへ行け」と言われ、行ってみるとそのホテルの地下の「カジノへ行け」と言われ、カジノへいくと屈強なお兄さんに「カジノは午後3時からだ」とすごまれ、結局近くのショッピングセンターの ATM でクレジットカードでキャッシングせざるをえませんでした。

日本同様、リトアニアも記録的な猛暑に見舞われていたため、歩いているだけでもかなり汗をかき日に焼けてしまいました。

チームに合流後、18時に予約した夕食がホテル側の都合で19時に変更されましたが結局20時を過ぎても用意されず結局近隣の中華レストランで食事をする事となりました。



街中を走るトロリーバス



街並み



ホテルの近くにあった屋外ハーフコート

7月16日 9:30 ペーンペジーへ移動

ペーンペジーは首都ビリニウスからバスで約2時間、人口約5万人のリトアニアで第5の都市だそうです。

12:00~13:30 練習 (Cido Arena)

CidoArenaの「CIDO」はラトビアの飲料メーカー名です。

収容人員約5千人。コートサイドには競輪コースがあり東欧一の競輪施設とのことでした。バスケットと競輪両用の築1年程度の新しい施設で、天井から吊下げ式のスコアボードがあり控室は審判とコミッショナーとで別々に用意されていました。また、審判控室にはコートのゲームクロックと連動した時計がありゲーム開始までの時間、ハーフタイムの残り

時間を確認することができました。



第 3,4 戦が行われた CidoArena のコート



CidoArena の競輪コース

コートサイド観客席と 2 階観客席の間に設置されていました。



審判控室のゲームクロックと連動している時計

19:00 日本代表 96 v s 96 リトアニア代表 第 3 戦 (Cido Arena)

(R: Antanas (46 歳) U1: Kitazawa U2: ジュードルーナス氏 (25 歳))

第 2 戦から 4 日間空いてのゲームとなりました。これまでリトアニアに対し大差で 2 連勝の日本でしたが、試合前中川 H.C.は「このままで終わるはずがない」と気を引き締めていらっしかったです。

渡航前の富田氏からのレポートや現地で日本のスタッフからの話で、リトアニア H.C.がこれまで 2 試合で通算 3 回テクニカルを取られていたことを聞いておりましたので、ベンチ対応については心の準備をして臨むこととしました。

観客が 200 名ほど入場し、試合前のリトアニアの選手紹介では照明が落とされスポットライトが当たる中コートに登場するという演出が行われました。試合開始前 9 分でのことでしたが照明の点灯が早く時間通りにゲームを始めることができました。

相手審判は 2 人とも国内ライセンスの方で近隣の町から来たそうです。どちらも英語がほとんどできず、ジュードルーナス氏は 3 人制の経験が少ないとのことでしたので、コート盤を使って基本的なメカニックをゲーム前に確認しました。

実際にゲームをやってみると二人ともスイッチ、ローテーションについてほぼマニュアル通りやってくれていましたので大きな問題なく進められたと思います。
判定の部分では下記2点について大きなギャップを感じました。

トラベリング シリンダーの考え方

については、過去の国際ゲームにおいても日本チームのトラベリングを取り上げられることがありましたが、それらとほぼ同様のケースと思いますが、突き出しの部分で相当数取り上げられてしまいました。

は、日本チームがゴール下でシリンダー内で手を挙げてショットに対してディフェンスしオフェンスがゴール（ディフェンス）に向かってきているのですが、イリーガルユースオブハンズ（手がシューターの肘、腕に当たっている）としてこちらも度々取り上げられてしまいバスケットカウントになってしまうことが多くありました。

このような判定が続き日本チームはかなりのフラストレーションを溜めていたようですが、強いプレッシャーと豊富な運動量を伴うディフェンスから度々速攻を生み、度々3Pを沈めなどして同点で終了したのは素晴らしいと感じました。

7月17日 12:00 日本代表 76 v s 82 リトアニア代表 第4戦 (Cido Arena)
(R: Kitazawa U1: Gintaras (36歳 FIBA1年目) U2: Linas (39歳))
U1のGintarasは税関職員、FIBA1年目でやる気満々のレフリースタッフでした。
U2のLinasはこの街の警察官で国内ライセンスの審判員。英語はほとんどできなかったのですがGintarasに通訳をしてもらいコミュニケーションをとりました。
Pre-Game conferenceでは、Gintarasが「Tomasが良く言う言葉だけ」ということで「重要な4つのC」という話をしてくれました。

- ・ Common sense (共通理解)
- ・ Consistency (一貫性)
- ・ Cooperation (協力)
- ・ (Eye) Contact (アイコンタクト)

判定ではトラベリング、センタープレイヤーのショットに対する守り方について昨日同様の基準で取り上げられることがあり、中川 H.C.が激しく抗議するシーンが何度かありました。ただし、ショットについてはリトアニアのガードの選手が取り上げられることもあり、選手やコーチに不満な様子はありません。小さい選手がゴール下で頑張っていること自体がNGなのではないでしょうか？

試合後中川 H.C.からゴール下の守り方について「どうやって守ったらいいんですか？」と質問を受け正直答えに窮してしまいました。

翌日の練習時にも大神、吉田両選手からトラベリングについての質問を受けました。

別の話ですが、体格で劣る日本チームはリバウンド時のスクリーンアウトを全員で徹底していたのですが、リトアニアのセンタープレイヤーはマッチアップがずれた時日本の小さい選手のもぐりこんでしまうようなスクリーンアウト（身長差が30センチ以上のケースもあり体格差があるので仕方がないのですが）を非常に嫌がりボールの行方に関係なく日本選手の首や顔を腕で払いのけるラフなプレーが2度ほど起きました。いづれも近くにいた審判がリトアニアの選手のパーソナルファウルを取り上げ大きなトラブルにはつながりませんでした。日本国内であれば体格差があったとしても起きにくいプレーだと感じました。

16:00 ビリニウスへ移動

日本の猛暑のようにリトアニアも記録的な暑さでした。用意されたバスのエアコンの効きが非常に悪く蒸し風呂状態のバスで 2 時間の移動は選手にとっては体調管理が難しかったと思います。

7月18日 9:30~11:00 練習 (Rytas Arena)

Rytas Arena は収容人員約 1700 人。今年 7/22~8/1 まで開催される U-18 男子ヨーロッパ選手権の会場の 1 つになるということでフロアには「FIBA EURO」のペイントがされていました。隣接する Siemens Arena は収容人員 11,000 人のリトアニア最大の体育館で U-18 のメイン会場になるそうです。



Rytas Arena での練習

19:00 日本代表 60 v s 54 リトアニア代表 第 5 戦 (Rytas Arena) 雨天途中中止
(R: Kitazawa U1: Gintaras U2: Vytis (25 歳))

中川 H.C.は何としても勝ちたいという意気込みを持って臨んだゲームでした。

U1 は昨日に引き続き Gintaras。

U2 は何と日本チームの通訳をしてくれていた Vytis。昼間に Tomas に誰が審判か聞いた時には「わからない」と答えつつ近くにいた Vytis を指さし彼が審判をしているのを知っているか?と聞かれたことを思い出しました。その前フリには全く気付かなかったので非常に驚きました。Vytis は国内の 3 番目のリーグを担当していらしく 3 メンの経験はかなり少ないため Gintaras がいろいろと教えていました。

T.O.を協会が手配するのを忘れてらしく 30 名ほどいた観客の中から T.O.3 名を厳選し試合を開始しました。

両チームとも気合いが入っており序盤から激しいゲームとなりました。

判定の面では第 3,4 戦でのトラベリング、ショットファウルがコールされるようなことは無く日本選手は比較的集中していたように見受けられました。

私がリトアニアのイリーガルなスクリーンプレーを結果的に 3 つ取り上げたのですが、それについてリトアニアの H.C.は不満だったようです。しかし過去担当した 2 試合の中で合計 3 つ取り上げていたので、選手は「この審判はこのプレーを含んだね」という感じでしょうか、割り切っていたようであからさまに不満を示すようなことはありませんでした。

3P 開始直後から外では雷雨が降り始め雷音が体育館のなかまで響いてきます。相当な豪雨だったようで相当な量の雨漏りが発生し 3P 残り 1:28 で終了としました。

中川 H.C.は最後まで続けたかったようですが、選手の安全を考え中止に同意をいただきました。



左 Vytis

右 Gintaras



最終戦終了後スタッフ、選手と

- 7月19日 8:30 チェックアウト・出発
11:30 ビリニウス発
12:05 コペンハーゲン着
15:45 コペンハーゲン発
7月20日 9:35 成田着 解散

ビリニウスの空港で現地通貨リタスから日本円に両替をしようと2か所ある両替の窓口に行きました。1か所目は日本円を置いておらず2か所目は少額しかなかったため一部を日本円、残りをユーロへ替えました。ユーロを持っていても仕方がないので、免税店で買いものをしユーロで支払ったらリタスでお釣りが来ました(苦笑)

今回は私にとって日本チームと行動を共にし自分の国のゲームを海外で吹くという初めて体験でした。以前にアジア大会で帯同したことはありましたが、大会が始まればスケジュールはチームとは全く別になりますので、今回のように練習や移動などすべて一緒に行動することは初めてのことでした。

今回の一番感じたことは、いつも以上に「ニュートラルな気持ちで吹く」ということです。

公式戦であれば自国のゲームを担当することはありませんが、今回のような遠征ではすべて日本のゲームです。結果的にどちらかのチームに有利になってしまうような笛があったとしても、その後も淡々とニュートラルにいつも通りに吹く気持ちを持ち続けました。

それぞれの審判に対しそれぞれのコーチや選手がいろいろアピールがありますが、それは他のゲームと同じように受け止め、対応しました。

余計なこと(日本チームに有利に、もしくは反対に有利に吹いていると思われぬように)を考えると良い結果を導き出せないと思っています。

岩手県所属審判もゲーム中のいろいろな声に惑わされず強い気持ちを持って、しかしコートから離れば謙虚に周囲の声に耳を傾けて一緒に精進していきたいな、ということを感じました。